2019年4月27日（土）　山陽新聞［山陽子ども新聞］

フライトドクター　高橋治郎さん

ドクターヘリに乗る高橋さんの仕事は、大変だけどやりがいがあるそうだ

【岡山市・第三藤田小6年、矢吹暖（のん）】

私はドラマの影響でドクターヘリや救急医療に興味をもち、川崎医科大付属病院（倉敷市松島）のフライトドクター高橋治郎さん(38)を取材した。

ドクターヘリは2001年に日本で初めて同病院に導入され、岡山県ではこれまでにおよそ7200件出動している。運航管理室に出動要請が入ると、トランシーバーで乗務員（操縦士、整備士、医師、看護師）に連絡がいき、必要な資材、薬品、点滴などを持って5分以内に離陸する。

わずかな情報だけを頼りに現地に向かうが、現場に着いたら5人も患者がいたり、足がちぎれそうなひどいけがだったりと、困難な状況は少なくない。でも、高橋先生は患者さんが元気になる姿を見るのが幸せで、救命の仕事に大きなやりがいを感じているそうだ。

私が病院を出る時、ドクターヘリがフライトに出るところに遭遇した。心の底から「頑張ってください」の気持ちで見送った。

患者の元気な姿幸せ

【倉敷市・庄小6年、弘田寿民】

僕は幼い時から近所でドクターヘリが飛ぶのを見て、救命救急医にあこがれていた。そこで川崎医科大付属病院（倉敷市松島）の救命救急医でフライトドクターの高橋治郎さん(38)を取材した。

救命救急の現場は常に時間との闘いで、ドクターヘリの要請から5分以内には離陸しなければならない。患者情報はフライト中に確認するが、実際に見るまで様子が分からないため、とっさの判断力が必要とされる。高橋先生は「さまざまな状況を想像・覚悟しておくことが大切。全体を見まわす広い視野も必要」と話してくれた。

高橋先生はDMAT（災害派遣医療チーム）隊員として東日本大震災や西日本豪雨などの災害現場に行ったそうだ。現場では患者の症状を適切に判断する力やコミュニケーション能力、体力が求められる。僕も将来DMATの医師になり、一人でも多くの命を助けたいという気持ちが強くなった。

現場での判断力必要